

中部の

エネルギーを 築いた



浜松の電気事業を軌道に乗せた 鈴木 幸作

浜松では、最初に計画された水力事業が失敗（明治26年9月）したため事業化が遅れていたが、町が発展する中で、地元の政財界をあげて電灯事業への取組みがスタートした。事業を軌道に乗せたのが鈴木幸作である。



鈴木幸作
〔東京電灯株式会社浜松営業所
沿革〕昭和12年

醤油醸造業ヤマヤ

鈴木幸作（1855～1930）は、安政2年9月、浜名郡白脇村（現浜松市白羽町）で醤油醸造業を営む鈴木弥助の長男として生まれた。父弥助は事業意欲が強く、自宅を改造して醤油醸造を開始し「ヤマヤ醤油」として売り出した。浜松中心部の成子町へと移転し事業の拡大を目指したが、負債だけがかさんでいった。明治5年11月、幸作が18歳のときに父弥助から家業を受け継ぎ、早朝から深夜まで醤油づくりに明け暮れた。同じ成子町で小間物業棒屋を営む中村藤吉の助言を受けながら、報徳精神に基づく経

営で着実に事業を進めた。鈴木は中村を生涯の師として仰ぎ、成功した後も感謝の念を忘れなかった。

明治22年、政府は新たに醤油税を課し、同業者の多くが撤退する中で、鈴木はひたすら家業に励んだ。父弥助も幸作に協力し、大福寺（三ヶ日）から納豆づくりの製法を学び、「浜納豆」として売り出した。浜納豆は今日も浜松名物としてヤマヤ醤油から売られている。日清戦争が始まると、醤油需要が増大して業績も急回復し、浜松有数の醤油醸造業者へと発展し、明治33年9月に静岡県醤油同業組合が設立されると西遠支部長に推されるまでになった。家業の再建を果たした後、鈴木は浜松での多くの事業に関わるようになるが、その一つが浜松電灯であった。



中村藤吉
〔浜松委託倉庫創業100年の
歴史〕平成元年5月

営を受けながら、報徳精神に基づく経

浜松電灯社長

浜松の電灯事業は、中部地方では最も早い水力発電での供給を目指したが、水量の測定を誤り技術的問題も重なって、失敗に終わっていた。このため、各地で電気事業が次々に

スタートする中、浜松での電気事業は遅れていた。明治35年、横浜の神奈川電灯が進出し営業許可を得たが、事業化に至らなかった。浜松の町が発展するなかで、電気を求める声



浜松電灯の発起人たち
(神谷昌志『浜松古跡図絵』昭和62年)

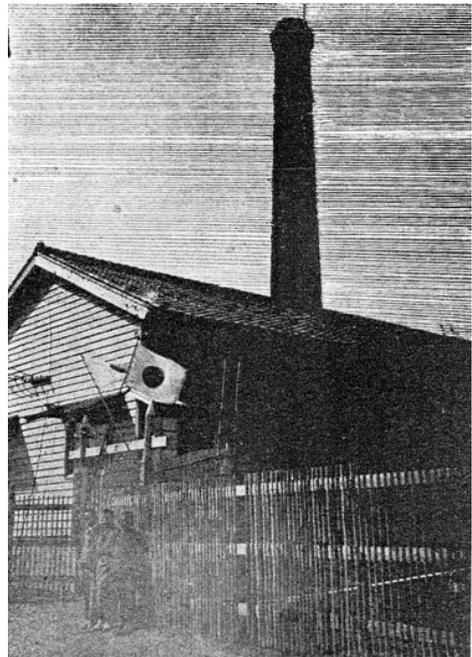
が高まり、明治36年12月、神奈川電気の仕事譲りを受けて、鈴木幸作の他、山葉寅楠(日本楽器)、林弥十郎(浜松陸運)、宮本甚七(日本形染)、中村忠七(浜松町長)、鶴見信平(初代商業会議所会頭、後に浜松市長)ら浜松の政財界人により事業をスタートさせた。先行した静岡電灯に範を取って火力発電での供給を計画し、設計・管理は静岡電灯に関わった京都大学教授小木虎次郎に委嘱した。浜松駅南側の砂山町に発電所を設け、明治37年12月に開業した。GE製75kW、WH製160kW、計235kWの設備を備え、赤れんが造りの高さ78尺の煙突が駅からもよく見えたという。燃料の石炭は九州炭を用い、豊橋・清水港から運ばれた。

醤油造りが専門の鈴木幸作は、電気については素人であったが、堅実な経営ぶりが評価されて社長に推され、報徳精神に基づく勤儉節約の経営を進めた。毎朝自宅から砂山町の会社まで歩いて通い、途中で石炭のひとつかけらでも落ちていと拾って袂に入れ、会社の石炭場へ行ってそっと置いたと言う。石炭は

荷車から落ちたのに違いなかったからである。また、夜、映画会が催されるときは、「今日は活動写真があるから電灯は一つにしなさい」と家人に語っていた。

日露戦後、浜松の電灯電力需要が急増した。浜松電灯は新規の水力地点(引佐郡伊平村東久留米地区)を探したり、急遽吸入瓦斯発電所(200kW)の建設を計画したりしたが、大井川で水力開発(小山発電所1400kW)を進めていた日英水電が、電力不足に陥っている浜松に目

を付けて進出してくると、水力発電を基礎とする低廉な料金に対抗できず、同社取締役の中村円一郎と鈴木とが「再三折衝ヲ重ネ明治44年3月漸ク両者間ニ了解成リ」合併された。浜松電灯の営業は、6年間強にとどまった。



浜松電灯砂山町発電所
(『電気之友(169号)』明治38年8月)

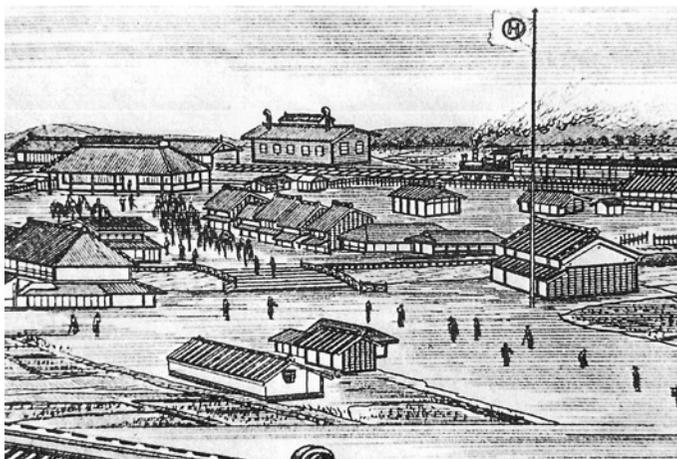
浜松財界での活躍

鈴木幸作は、明治26年に浜松商業会議所が発足するとその会員となり、浜松電灯のほか、各種の地元事業に参画した。中村藤吉の後を継いで浜松委託会社の第4代社長に就任したほか、財界あげて取り組んだ浜松鉄道（後浜松軽便鉄道、遠州鉄道）の発起人に加わり、取締役（浜松軽便鉄道）にもなった。浜松の大手会社の日本楽器、日本形染、

東海煉瓦等の監査役にも就いている。また明治25年から町議会議員を務め、明治44年7月に市制が敷かれると市会議員に選ばれ、大正12年まで3期連続で選出された。

大正13年1月、70歳を機に引退し、幼少時から尊敬していた祖父の名前を継いで五郎作と名乗った。このとき、浜松市に1万円の寄附を申し出た。市長渡辺素夫はこれを大変感謝し、小学校に入学する生徒全員に、毎年鉛筆3本宛配付することとした。鉛筆は「五郎作鉛筆」と呼ばれたという。昭和5年7月、咽喉癌を患い、惜しまれながら75歳の生涯を閉じた。郷里白羽町の法蔵寺に葬られている。

幸作の末弟で、子どもが無かった幸作の養子となっていた鈴木小吉（1873～1945）が家業を継いで、大正15年幸作を襲名した。小



明治30年頃の浜松駅前（『静岡県明治銅版画風景集』平成3年復刻）



鈴木幸作(小吉)

（『浜松委託倉庫創業100年の歴史』平成元年5月）

吉（襲名後の幸作）は、静岡中学出身の秀才で、ヤマヤ醤油の事業を発展させると共に、西遠印刷、浜松養魚等の社長を務め、浜松商工会議所の会頭や浜松市会議長を務め、昭和7年貴族院議員となっている。

（浅野 伸一）